横浜国立大学初年度全学対象英語科目「自立英語」の成績評価を考える

Research note on the evaluation of *Independent English Learning*, a first-year general education English course at Yokohama National University

国際戦略推進機構・渡辺 雅仁
国際戦略推進機構・坂本 文子

キーワード： 英語科目、成績評価、履修目標、到達目標、習熟度別クラス編成

外国語キーワード：general university English course, course evaluation, advanced goal, standard goal, proficiency-based class

要旨
横浜国立大学では 2015 年度に策定した「授業設計と成績評価ガイドライン」が全学的な成績評価の原則を規定する。「ガイドライン」は、従来の評価点による評価に代わる「履修目標」と「到達目標」をルーブリックの中心に位置づける評価を提唱する。しかし、複数の同一科目担当教員が習熟度別に編成されたクラスで、日々の学習を総合的に評価する必要のある初年度全学対象英語科目では、この評価方法は単純には実践できない。本稿ではその問題点を指摘しつつ、科目担当教員の評価についての共通認識が図られるよう、1 年生対象の「自立英語」について 2 名の教員の具体的な評価方法についてまとめたものである。

1. はじめに

評価活動は、授業における学生の学習を具体化し、動機付けを与える短期的な目的のみならず、教育機関の組織全体の中・長期のさまざまな目標に対する達成度を確認する目的も持つ。それだけに、評価活動についての共通認識は、教育機関において重要な課題と言える。しかし、実際には、大学を例に取ると、大学全体 – 学部・学科・コース – 科目群 – 個々の授業、といったピラミッド構造の中で、容易には共通認識は得られない。1 年次に学部を超えて提供される、全学教育科目としての英語科目においても同様で、評価について一般的な情報は与えられるものの、その具体的な方法については十分な情報の共有は行われていない。本稿は、横浜国立大学が大学全体として抱える評価に関する問題に対し、根本的な解決法を提案するものではないが、少しでも共通認識を前進させられるよう、具

体的な評価方法について実践報告を行うものである。

2. 横浜国立大学における成績評価

横浜国立大学では、2015 年度に「授業設計と成績評価ガイドライン」（以下、「ガイドライン」）が策定され、全学統一の「成績評価基準」と「授業別ルーブリック」が導入された。このガイドラインに規定されている成績評価基準が、本学における成績評価を行う際のスタンダードとなっている。「ガイドライン」に沿ってシラバス作成を行う具体的な手順を記したものとして、2015 年 12 月に大学教育総合センター FD 推進部（当時）によって「教員向け 授業別ルーブリック作成マニュアル」（以下「マニュアル」）が刊行されている。

「マニュアル」では、本学において「各教員が持つ成績評価のグレードの認識を統一する」ことと「教員と学生間の成績評価に関する認識を統一する」こと、という 2 つの目標の達成を目指し、それぞれの目標を達成する手段として「成績評価の基準表」と「授業別ルーブリック」について詳しく解説されている。「成績評価の基準表」は従来、100 点満点の評価点から「秀≧90、優≧80、良≧70、可≧60、不可＜60」のような基準で与えられてきた評価に、「履修目標: 授業で扱う内容（授業のねらい）を示す目標」と「到達目標: 授業において最低限学生が身につける内容を示す目標」という評価コンセプトを導入し、本学の「秀、優、良、可、不可」による評価を以下のように意味付ける試みである。

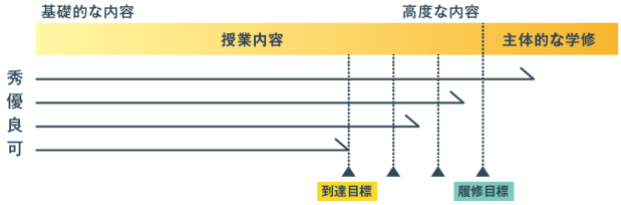
表 1　成績評価の基準表

秀	優	良	可	不可
履修目標を越えたレベルを達成している	履修目標を達成している	履修目標と到達目標の間にあるレベルを達成している	到達目標を越えたレベルを達成している	到達目標を達成できていない

この履修目標と到達目標については「学生向け」として以下のように図表を用いて解説している。ここでは「秀」の条件として「主体的な学修」というコンセプトが導入されている。

表 2　履修目標と到達目標（学生向け）

履修目標	授業で扱う内容（授業のねらい）を示す目標です。より高度な内容は自主的な学修で身につけることを必要としています。
到達目標	授業を履修した人が最低限身につける内容を示す目標です。履修目標を達成するには、さらなる学修を必要としている段階です。



成績評価の基準表とともに「マニュアル」はルーブリックによる評価についても併せて提言を行っている。ルーブリックは、学生が履修する科目について何をどのように学習すればよいかを視覚的に把握し、教員が学習の終了後ルーブリックに基づいて学生にフィードバックを与えることにより、学生の学習の現状と今後の課題を明らかにし、PDCA サイクルに基づいた自律的な学習の継続へと向かわせることを目的としている。

ルーブリックは、評価基準、評価尺度、評価観点、課題の 4 つを基本要素として持つ（Stevens et al., 2013/2014 佐藤ら訳, p. 4）。以下は、「知識伝達型の授業」におけるルーブリックの例として「マニュアル」が掲載しているものであるが、Stevens et al.,（2013/2014 佐藤ら訳）の基本要素との関係はどのようになっているのであろうか。

表 3　授業別ルーブリック

① 授業形態：講義（知識伝達型の授業）

評価項目	評価基準				
	期待している以上である	十分に満足できる 履修目標	やや努力を要する	努力を要する 到達目標	相当の努力を要する
理解度	授業内容を越えた自主的な学修が認められる	授業内容をほぼ100%理解している	到達目標は理解しているが、授業内容に不足がある	到達目標に達していることが認められる	到達目標に達していない
課題解法能力	解法が分からない他人にアドバイスができる	何も参照せずに独自の能力で課題を解くことができる	参考書などを参考にすれば、独自で課題を解くことができる	他人のアドバイスがあれば課題を解くことができる	他人のアドバイスがあっても自発的に課題を解くことができない
調査能力（予習）	自ら進んで予習範囲を越えて調べている	予習範囲を十分に理解し、他人に説明できる	指示した予習範囲の理解にあいまいな点がある	指示された範囲は予習するが、理解が不十分である	指示された範囲は予習が不十分である

Stevens et al.,（2013/2014 佐藤ら訳）の「評価基準」は本学の評価システム上の「評価基準」と合致し、「評価尺度」は「秀、優、良、可、不可」の評価、「評価観点」は「評価項

目」にそれぞれ対応する。「課題」に相当するものが「授業科目」となる。「課題」とは task の訳語であり、一般的に、「特定の目的を達成するために行う課題」（金澤 (2011), p. 28）を意味する。「課題」は最終的に完成させる学習成果物のイメージと、完成に至るプロセスがより明確なものほど、ルーブリック評価にはふさわしい。多様な学習活動が網羅される「授業科目」を「課題」として対応させる場合には、評価基準がどうしても抽象的なものとなってしまう。また、ルーブリック評価が十分その効果を発揮するためには、学生と教員の双方においてこの目的を理解し、主体的に行動する必要がある。

3. 1 年次全学対象英語科目から見た評価システムの問題点

「マニュアル」に基づく評価を 1 年次全学対象英語科目での評価に応用しようとすると、いくつかの問題点が浮かび上がってくる。

3.1 困難な成績評価グレードの認識の共有

まず、1 年次全学対象英語科目（以下、「英語科目」）のように、複数の科目担当教員が同一時間帯に同一科目を担当する場合、履修目標と到達目標についてすべての科目担当教員間でイメージを共有することが難しい。英語科目が習熟度別にクラス編成されていることを考慮するとなおさら困難になる。英語科目を統括する本学の英語教育部が一般的な「統一シラバス」を 1 科目につき 1 つ作成する。個々の教員は、統一シラバスに基づきつつも、担当するクラスの学生の状況や使用する教材、授業の展開等に配慮した「個別シラバス」を担当するクラスにて配布する。個別シラバスが最終的に学生の学習の方向性を規定するものとなるので、「秀、優、良、可、不可」の評価がクラスによって異なるものとなる。

3.2 評価点とルーブリック評価の不透明な関係性

教員は担当クラスの履修者の評価を学務情報システム上より、100 点満点の評価点にて入力する。一方、学生は、「秀、優、良、可、不可」の評価のみを学務情報システム上から確認する。「成績評価の基準表」と「授業別ルーブリック」は評価をより分かりやすく提示し、PDCA サイクルにより自律的な学習の継続へとつなげる目的で導入された。しかし、シラバスに示されたルーブリックに基づいた学習のフィードバックはほとんど行われることなく、教員も学生も評価点を評価の最終形としてしまっている。

英語科目では、学期中に 1、2 回、テストや実技試験を実施して評価するのではなく、学期内に実施した複数の小テスト、レポート、実技課題、授業時の活動への貢献等（以下、「学習成果物」）を総合的に加味して評価する。ルーブリックによる評価は、個々の学習成果物に対しては有効なフィードバック手段となるが、学習者の複数の学習成果物を統合し

て評価を行う場合、その意味するところが明確にならない。

表 4　自立英語 授業別ルーブリック

評価項目	評価基準				
	期待している以上である	十分に満足できる(履修目標)	やや努力を要する	努力を要する(到達目標)	相当の努力を要する
能力の向上に取り組む (20%)	授業に求められる最低限の準備に対し，倍以上の取り組みを行った。	授業に求められる最低限の準備に対し，1.5倍から2倍程度の取り組みを行った。	授業に求められる最低限の準備に対し，1.25倍から1.5倍程度の取り組みを行った。	授業に求められる最低限の準備を行った。	授業に求められる最低限の準備もできていない。

上は、英語科目「自立英語」における統一シラバス上でのルーブリックの一部である。「能力の向上に取り組む」という評価項目について、「授業に求められる最低限の準備に対し、1.5 倍から 2 倍程度の取り組みを行った」場合に履修目標を達成したことになる。何をもって、「1.5 倍から 2 倍程度」とするのかについて、提出された複数の学習成果物の状況から、教員が具体的に根拠を示す必要がある。

3.3 「秀」評価の特殊性

先に指摘した通り、2015 年度以降「秀」は単純に評価点として 90 点以上を取得した場合に与えられるものではなく、「主体的な学修」が明確に認められる場合にのみ与えられるものとなった。しかし、何をもって「主体的な学修」とするかについて、共通理解が得られているわけではなく、毎年のように、秀を与えすぎないよう厳密な成績評価を行うことを促す連絡文書が大学より教員に送付される。教員は 100 点満点で評価を行う際に、多数の学生が 90 点以上を取得しないような評価上の措置を講じ、90 点以上を取得した場合には、主体的な学修が行われたかどうかを確認し、行われていない場合には得点が 90 点未満となるよう調整する必要がある。そのためにも、教員は、単純な客観テストによる得点のみならず、期待値とそれ以上の成果の区別ができるような課題を課すか、学生が自主的に別の学習活動を見つけられるように促すなどをする必要がある。

4.　1 年次全学対象英語科目「自立英語」の評価

このように、本学の評価システムにはいくつかの問題を指摘できる。問題の根本的な解決には教育学上の理論的な考察のみならず、科目担当者間のより緊密な連携と情報共有を十分進めた上での討議が欠かせない。「はじめに」の章で指摘した通り、本稿は問題の根本的な解決を提示するものではない。以下では、問題を具体化できるよう、1 年次全学対象英語科目「自立英語」について、本稿の著者である渡辺と坂本のクラスについて、事例報告したい。

外国語習得の効率性（effectiveness）は、多量かつ質の良いインプットと結びついている。これは第二言語習得論における定説である。このため、教師は外国語を指導の目的とするだけではなく、コミュニケーションを行うメディアとして、学習者が外国語に触れたり使ったりする機会を可能な限り保証しなくてはならない（Ellis, 2008）。多量かつ質のよいインプットの確保のために、長期間の継続した学習、いわば学習の持続可能性（sustainability）が求められる。持続可能性は、学習者の主体的な学習（learner-centeredness）がなければ実現しない。自立英語ではこの目的を達成するため、学習者に複数の学習法と多様な学習コンテンツを授業内で提示し学習者に自ら選択させる。

自立英語のもう 1 つの柱は、大学院留学生 TA との英語による交流である。この交流を通じて、学生は、話者それぞれの母語を反映した多様な英語（variety of Englishes）に触れることである。英語を母語としない英語話者が、英語母語話者を数の上で圧倒し、英語が実質的に世界における共通語となった現状を考える時、このような機会を提供する意義は大きい。

このように、自立英語では、授業の柱である、インプットの確保と多様な英語の学習をどのように評価に組み入れるかについて教員は明確な方針を持たなければならない。

4.1 渡辺担当クラス

以下は、2022 年度春学期において渡辺が作成したルーブリック中の評価項目と統一シラバス中の評価項目である。統一シラバスの項目を踏襲しつつも、より PDCA に沿った評価項目が設定されている。

表 5　統一シラバスの評価項目と渡辺作成の評価項目

統一シラバス	渡辺作成
自身の英語能力について，得意分野と不得意分野を見つけることができ，自分のレベルに合った適切な学習活動をデザインする。 (20%)	PDCA の P 毎回の授業において，学習方法とストラテジーの学習を行い，自身の英語能力について，得意分野と不得意分野を見つけることができ，自分のレベルに合った適切な学習計画をデザインする。 (20%)
能力の向上に取り組む。 (20%)	PDCA の D 自宅学習として，自身でデザインした学習計画に基づき，学習方法とストラテジーを実践し，実際の学習を My Journal と語彙ノートを用いて，記録する。 (30%)
さまざまな課題に対し，さまざまな学習方法を試行する。 (20%)	PDCA の CA

	毎回の授業において，実施した学習方法について客観的に評価し改善策をデザインし，My Journal に記録する。 (10%)
英語を用いて他者と交流する。(10%)	英語を用いて他者と交流する。 (10%)
さまざまな英語のアクセントを理解する。 (10%)	さまざまな英語のアクセントを理解する。(10%)
最終プロジェクトにおいて，アクションプランを，デザイン・実施し，その効果を評価する。 (20%)	最終プロジェクトにおいて，アクションプランを，デザイン・実施し，その効果を評価する。(20%)

授業における課題は基本的に、90 分の授業中に完成させる「授業内課題」と自宅にて完成させる「自宅学習課題」に二分される。授業内課題は当日の授業の出席を確認する意義も有するもので、一定の形式と学習量が満たされていれば内容に深く立ち入ることなく、1 回の課題につき 5 点満点で 5 点が与えられる。一方、自宅学習課題は授業後に時間をかけて完成させるもので、10 点満点で採点する。その際、授業での指示通りの量を持つ課題が完成している場合には 7 点を与え、量の程度によって、5 点、3 点といった評価も行う。指示を理解していなかったり、提出物に不足がある場合には再提出させる。10 点は、相応な量の自主的な追加学習が認められた場合にのみ与える。

学期の終了後、すべての課題に評価点を入力し終えたら、それぞれの課題を表で設定した評価項目ごとに分類して合計点を算出する。1 つの課題が複数の評価項目を含む場合には、評価項目の数で均等割りする。例えば、第 2 回授業の課題として、RLG テストの結果から自身の英語学習の振り返りを自宅習課題とした。この場合には、得点を「PDCA の CA」として分類した。また、第 3 回授業では、英字新聞 Japan Times について、6 つの記事の見出しと最初の段落から、記事の概要を把握させた上で、興味を持った記事 3 つについて、しっかりと読み終えた後、1 つずつの記事について、Where, When, What の観点から事実と、I を主語にして記事と自身との関係をまとめさせた。この課題は、6 つの記事について概要を理解する活動を「PDCA の P」、3 つの記事を読み通してまとめる活動を「PDCA の D」のように分類し、全体の得点を 2 分の 1 ずつ分割して記録した。

英語教育部の授業支援システム領域に掲載されている 100 本以上の留学生 TA の自国の文化を英語で紹介する動画について視聴する、第 9 回の授業課題では、1) リスニング中心学習、2) 留学生の国と自国との比較、3) 留学生の主張について反対、賛成の両面からの考察、4) 動画の内容と自身の経験を結び付けた考察、5) 動画の内容について、事前・実際の学習・事後の 3 つのステージで自身が内容に関して設定した仮説の検証、6) その他自身でデザインした学習、の 6 つの学習テンプレートを与え、学生が自分にあったものを 1 つ選択して完成させた。提出されたテンプレートは「PDCA の D」として評価した。

授業最終日まで 5 回に分けて実施する最終プロジェクトでは、PDCA サイクルに基づいて学習者が翌週までの学習をデザインし、実施した学習を振り返られるよう、学習したことを示す学習成果物の提出と、学習の計画や振り返りを報告書をそれぞれ別のレポート課題として提出させ、おのおのに 10 点満点の評価を与えた。最終プロジェクト期間における 1 週分の課題の得点は、それ以前の週の課題の得点より多くなるようにした。

2022 年度は 3 クラスを担当したが、クラスにおいてそれぞれの課題の評価方法は変えることなく、表で設定した 5 つの評価項目ごとに、指定した割合となるように部分点を決定し、部分点を合計して最終的な評価点とした。担当した 3 クラスにおいて、同数かつ同一の課題を課しているので、1 クラスについて評価方法が決まれば、残りのクラスについてはその方法を複写することで迅速に評価点は算出できる。90 点以上取得した者について、提出された課題を再確認し秀評価にふさわしい自主的な学習が認められることを確認した。

以下は、渡辺担当自立英語クラスの過去 2 年間の評価得点について、表計算ソフトを用いて基本的な統計量と 1 クラスあたりの秀の人数をまとめたものである。まとめにおいて、欠席回数が多く、到達目標である 60 点を大幅に下回る得点は除かれている。[1]

表 6　渡辺担当自立英語クラス記述統計

クラス	2022-1	2022-2	2022-3	2021-1	2021-2
レベル[2]	9/16	14-15/16	7-8/14	16/16	15/16
平均	73.29	72.12	75.96	80.22	79.2
標準誤差	1.32	0.95	0.97	1.77	1.99
中央値	74	72	75	81	84
最頻値	76	60	73	95	60
標準偏差	7.79	7.65	8.44	10.02	11.75

[1] 表中 2022-2 と 2022-3 のクラスは授業開講直前に教員の担当クラス取りやめの事態が生じ、通常の 2 クラスを 1 クラスに合同したため、1 クラスあたりの人数（データの個数）がそれぞれ 65, 76 のように通常のクラスサイズ（約 38 名から 45 名程度）よりも大きくなっている。2022-2 のレベル 14-15/16 は全 16 クラスの中で 14 位と 15 位のクラスの合同、2022-3 のレベル 7-8/14 は全 14 クラスの中で 7 位と 8 位のクラスの合同を表す。

[2] 「レベル」行の数値は「時限内の順位/全体のクラス数」を表す。例えば、「9/16」は全 16 クラス中の 9 位のクラスを表す。

分散	60.68	58.45	71.19	100.31	138.11
最小	60	60	60	60	52
最大	93	97	98	95	95
合計	2565	4688	5773	2567	2772
調査数/履修者数	35/38	65/76	76/78	32/37	35/41
秀の数（割合）[3]	1 (2.6%)	1 (1.3%)	7 (9.0%)	5 (13.5%)	6 (14.6%)

統計量のそれぞれの項目は、年度ごとにある程度のまとまりを観測することができる。しかし、年度ごとに指導や評価の重点等は変わるので、年度やクラスに応じて数値の変化を見ることができる。2022 年度のデータにおいて、秀について 7 名(9.0%)の評価が出ているのが全 14 クラス中 7-8 位の 2022-3 クラスであり、全 15 クラス中最下位の 2022-2 クラスでは 1 名(1.3%)しか出ていないことから、秀の数とクラスレベルとの相関が示唆されているように見られる。しかし、実際には 2022-1 のように全 16 クラス中 9 位で、7-8 位の 2022-3 クラスとレベル的には大差ないクラスで 1 名(2.6%)であったり、2021 年度の 2 クラスのように、それぞれ全 16 クラス中 16 位、15 位のようにレベルが低いクラスでも 10%を超える秀の成績を得ることもある。2021 年度と 2022 年度で評価方法に大きな違いはないものの、評価の客観性の観点から、このような評価の違いが生じたことについて、今後も継続して検討する必要性が明らかとなった。

4.2 坂本担当クラス

坂本は独自のルーブリックは作成していない。独自に作成したのは、どういった課題に総合成績の何パーセントが付与されるのかという「個々の評価項目」のみである。それらの「個々の評価項目」は、総合すると「統一シラバス」にある評価項目の全てが網羅されるよう対応付けを行って設定した。表が学生に提示したシラバスの中の個々の評価項目である。項目(3)～(5)は個別的かつほぼ自動的に点が付与される項目であるが、項目(1)と(2)は関連しあっており、共に「秀」の評価に関わる重要な項目である。

[3] ここでの「割合」とは全履修者中の秀の取得者の割合を意味する。

表 7　学生に示した評価項目

成績評価の方法

成績評価は、基本的に学期全体を通じた授業中の活動と授業外の個人学習の取り組みに基づいて、質と量の両面から行う。英語力自体やテストの正解率等によって単純に評価されることはない。

(1) 出席: 20%: 欠席: -3 点, 遅刻: -1
(2) 学期を通じた学習: 60%
・授業内学習 20%: サマリーの質（5 段階評価）
・個人学習 40%: 毎回提出する『リーディング・リスニングノート』の質（5 段階評価）
(3) 期末プロジェクトのアクションプラン提出: 5%
(4) 期末プロジェクトの発表原稿提出: 10%
(5) 期末テスト（期末プロジェクト発表）: 5%

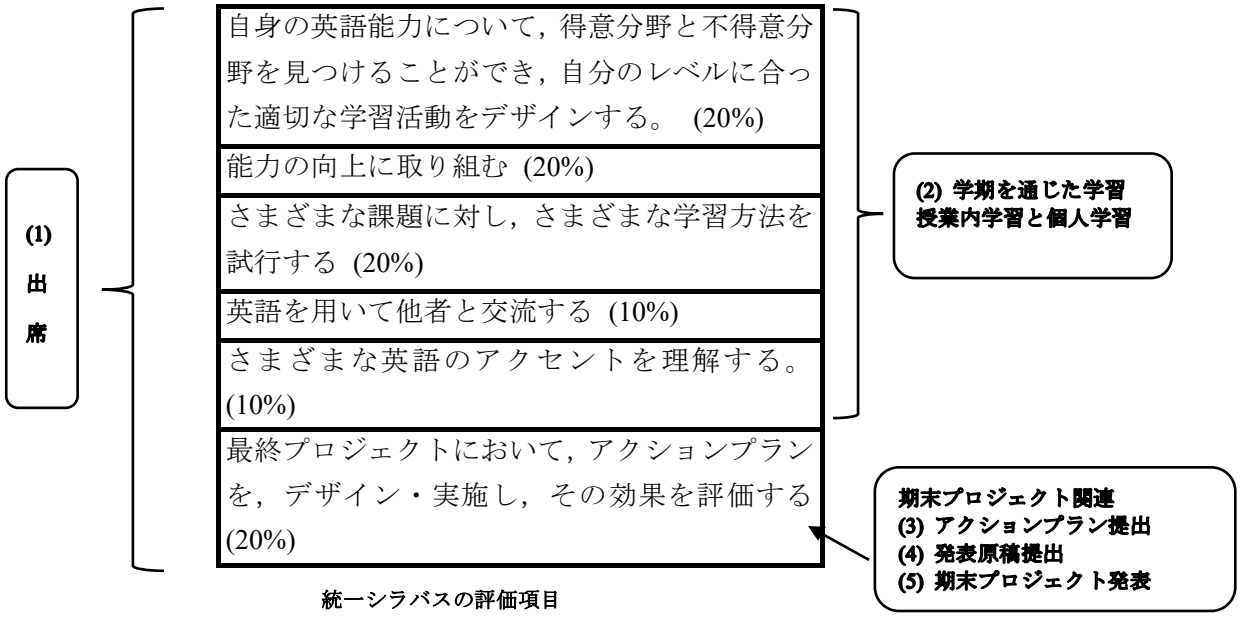


図 1　表 7 の個々の評価項目と統一シラバスの評価項目との対応

表の評価項目(1)~(5)のそれぞれの得点、そして、その判定基準を以下に示す。判定は、印象ではなくできる限り具体的な数値などで行うよう心がけた。

(1) 出席（継続性・主体性） 20 点

- 授業の出席（継続性）: 10 点
- 期待以上の学修活動（継続性・主体性）
  - ・オンデマンド TA 動画視聴レポート（主体性）: 4 点
  - ・個人学習で継続的な多量のインプットが行われた場合（継続性と主体性）: 6 点

(1)は「継続性」(sustainability)と「主体性」(learner-centeredness)をもって、学習に取り組めているかを評価するものである。まず、授業に出席していれば一定の継続性が認められると判断し、10 点を与えた。「期待以上の学習活動」の中の「オンデマンド TA 動画視聴レポート」は、個人の意志で行う課題ではなく全クラスを通じてもともと与えられている課題であるが、かなりの負荷がかかる課題であるため「主体性」に値すると認め、提出されていれば 4 点与えた。残りの 6 点は、項目(2)の個人学習の成果である毎週の「リーディング・リスニングノート」の評価で、追加の☆印が与えられたものに相当する。☆印は、かなり主体的な学修活動を行った場合にしか与えられない特別点（☆印 1 つにつき 1 点）であり、これにより「秀」を取得することがなかなか困難になっている。実際には、一週間あたり 10, 000 words 以上というかなりの量のインプットを継続して三週間行った場合にしか与えなかった。2022 年度は、最も付与回数が多いクラスでも 4 回だった（4 限クラス）。よって、実質としては、 1 学期間の成績の満点はこの 6 点を省いた 94 点で稀にそれ以上の点数となることがある、というイメージである。

(2) 学期を通じた学習

- 「授業内サマリー」20 点: 授業中に読んだもの、視聴したものの要約（英語で 40 words 程度）を書いて 90 分の授業内に提出。内容にはあまり深く立ち入らず、期限内に提出されていれば満点。
- 「リーディング・リスニングノート」40 点: 授業が終わってから次の授業までに個人学習で読んだもの、視聴したものの記録。大まかなワード数や視聴したものの時間数の他、要約や感想などを英語で書く。1 回につき 100 点満点で、最終的に春学期間の合計を 40 点満点に換算した。学生に提示した 1 回ごとの評価基準は以下のとおりである。

表 8　学生に示した「リーディング・リスニングの記録」の評価基準

	1 (49 点以下)	2 (50~59 点)	3 (60~69 点)	4 (70~79 点)	5 (80 点以上)
Reading のみの場合	2000 words に満たない	2000 words 以上	3000 words 以上	4000 words 以上	5000 words 以上
Listening のみの場合	2 時間未満	2 時間以上	3 時間以上	4 時間以上	5 時間以上
Reading + Listening の場合	両方を合わせて総合的に判断します。例えば、Reading が「第 3 段階」で Listening が「第 2 段階」の場合は、合計するとかなり英語に触れているので「第 5 段階」と評価します。				

学生にはこの基準のみを示し、Reading ならば 5000 words、Listening ならば 5 時間、つまり、毎週、第 5 段階に届くぐらいの多読・多聴を目指すよう伝え、これがルーブリックの「履修目標」(＝「優」) に相当するものであることを示した。これを超えるもの、つまり、「主体的な学修」レベルの成果は、以下の基準で評価点を算出した。

Reading の場合

- 5000 ~ 7999 words: 80 ~ 89 点
- 8000 ~ 9999 words: 90 ~ 99 点
- 10000 words 以上: 100 点（3 週間継続している場合には☆印をつけ、(1)の「継続性・主体性」に追加点として計上）

Listening の場合

- 5 時間 ~ 6.5 時間: 80 ~ 89 点
- 6.5 時間 ~ 8 時間: 90 ~ 99 点
- 8 時間以上: 100 点（3 週間継続している場合には☆印をつけ、(1)の「継続性・主体性」に追加点として計上）

(3)~(5) 期末プロジェクト関連の課題

- アクションプランの作成と提出 5 点: 指示を理解し適切に作成し期限内に提出されていれば満点。
- 発表のために作成した資料 10 点: 指示を理解し適切に作成し期限内に提出されていれば満点。
- 発表 5 点: 最終週の発表をおこなえば満点。

(1)~(5)のそれぞれについて評価点を出し、最終的にそれらを合計し、全体の得点を算出した。以下は、坂本担当自立英語 3 クラスの過去 3 年間の評価点について、基本統計量と

１クラスあたりの秀の人数をまとめたものである。まとめにおいて、50 点に満たない得点は除いた。

表 9　坂本担当自立英語クラス記述統計

	2022-1	2022-2	2022-3	2021-1	2021-2	2021-3
レベル	15/16	13/16	14/14	15/16	14/16	14/14
平均	75.70	77.02	79.51	79.06	76.86	79.59
標準誤差	1.98	1.76	1.68	1.66	1.89	1.70
中央値	79.25	77.02	84.19	80.50	80.00	85.00
最頻値	60	60	60	80	60	89
標準偏差	11.88	11.26	10.87	9.94	11.52	10.9
分散	141.09	126.71	118.26	98.85	132.79	118.7
最小	50	56	51	60	60	60
最大	94	93	91	93	91	91
合計	2725	3158	3340	2846	2844	3263
データの個数	36/41	41/45	42/45	36/37	37/42	41/43
秀の数（割合）	4 (9.8%)	3 (6.7%)	5 (11.1%)	4 (10.8%)	4 (9.5%)	4 (9.3%)

5.　まとめ

以上、本学の学習評価の原則とその問題点を踏まえた上で、1 年次対象の必修科目「自立英語」において英語教育部所属の渡辺と坂本の 2 名の教員が実際に行っている評価を概観した。

1 年次対象の 4 つの必修英語科目、自立英語、英語 LR、英語ライティング、英語プレゼンテーションは、いずれも、3.1 節において解説されているように、統一シラバスが規定する科目の全体像に基づいて個々の教員が個別シラバスを作成し、授業の方針と評価を行っている。今回、2 名の教員が実践している授業と評価は、それぞれ統一シラバスを踏まえつつも、大きく異なるものとなっていた。渡辺は PDCA サイクルの理解と応用を学習の中心に置き、履修目標を達成できれば満点の 7 割、明らかに自主的な学習が量として認められた場合に 8 割以上の評価を与えることを基本として個々の課題を評価し、その累計をもって学期全体の評価点を算出する。一方、坂本は、多読、多聴を学習の中心に置き、評価の客観性を高めるべく、自己申告による総語数、総学習時間数をもとに、全学の成績評価

に準じた基準表を作成し、最終プロジェクトの評価を別枠で確保しつつ評価点を算出している。

評価方法は大きく異なるものの、全体からすればレベルが最下層やその近くに位置するクラスでも秀を取得する可能性を持つ、という点で一致している。しかし、渡辺の評価方法では秀の割合が 2.6%から 14.6%のように大きく変動するのに対し、坂本の評価方法では 6.7%から 11.1%とあまり変動がない。このような共通点と相違点については、今後も情報の共有を進め検討する必要がある。

授業方法と評価方法は表裏の関係であり、同一科目において 2 名の教員の間で乖離が見られることに教科コーディネーション上の問題性を指摘することもできる。半面、いずれの教員も語学学習の効率性を高める良質なインプットの確保と英語の多様性の学習という自立英語の 2 本の柱は十分尊重した授業展開をしている。この点を持って、教員の自律性を尊重した教科コーディネーションとも考えることができる。いずれにしても、習熟度別クラス編成を行う英語科目において、全学の成績評価の基準表に基づいた、「秀、優、良、可、不可」の文字評価と、「秀」の特殊性を担保しつつ 100 点満点で学期の評価点を外部からの情報公開請求にも耐えられるように算出する具体的なプロセスについて、さらに情報共有を進める必要がある。

参照文献

Ellis, R. (2008). *Principles of Instructed Second Language Acquisition.* Retrieved from The Center for Applied Linguistics (CAL): http://blogs.sch.gr/stelam/files/2011/06/Instructed2ndLangFinalWeb.pdf

Stevens, D. D., Levi, A., & Fassler, W. B. E. (2013). *Introduction to rubrics: An assessment tool to save grading time, convey effective feedback, and promote student learning*. Stylus Publishing. [佐藤浩章・井上敏憲・俣野秀典訳 (2014) 『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部.]

金澤洋子 (2011) 「外国語指導法」岡秀夫編『グローバル時代の英語教育―新しい英語科教育法』 (pp. 17-34). 成美堂.

大学教育総合センターFD 推進部 (2015) 『教員向け授業別ルーブリック作成マニュアル』. 横浜国立大学. https://www.yec.ynu.ac.jp/about/rubricj.pdf